Journal of Intercultural Communication No.19, 2016 pp. 93-111
© SIETAR JAPAN 2016

Research Article

文化的差異の認知の構造と異文化の構成単位をめぐる考察：異文化感受性発達モデルとの比較と検証から

山本　志都
東海大学

要旨
本研究は、異文化感受性を日本の文脈から明らかにしていくことを目的とした一連の研究の一部として、個人の認知する文化的差異の構造と異文化の構成単位（集団の境界水準）との関係を検討し報告する。異文化感受性発達モデル（DMIS）では異文化として認知される限りにおいてはどのような文化の構成単位に対しても同じ異文化感受性の世界観が適用される。この前提を検証するために、国、地域、専門・組織の水準を用いた分析を行い、比較することによって検証が行われた。これらの分析は山本（2015）における研究が基礎となっている。分析結果に関する考察では特にDMISの「最小化」との比較から議論がなされ、また、異文化トレーニングへの示唆も提示された。結論として、これらの3つの水準での文化的差異の認知には共通点の多いことがわかった。しかし、「曖昧化（自他の区別を意識しない）」や「積極性（異質性への前向きな姿勢）」という概念では、相手が外国人であるか、他地域や他専門・組織の人であるかによって、その意味合いの変わることが明らかとなった。同じ異文化感受性の世界観が全ての文化の水準で適用されるという仮定の正しさについては、検証した3つの水準間には共通点の多いことを踏まえ、基本的にはそう考えられるという結論に至った。しかし、国レベル（外国人）でのみ異なる点もあり、日本での外国人への意識が反映されている可能性のあることから、この点には注意を要するとされた。

キーワード：異文化感受性、異文化トレーニング、異文化感受性発達モデル

1. はじめに

これまで異文化接触に関わる様々な概念や理論の研究がなされ、異文化トレーニングや異文化間教育の実践に活用されてきた。その一方で、グローバル人材育成という言葉が注目を集め、文部科学省はグローバル人材育成推進事業で大学に働きかけるなどしているが、語学力の向上や海外留学・派遣の奨励などがその主たる内容となっており、これらの取り組みはかつて国際化が提唱されていた時代からさほど変化はしていない。しかし、国際化時代とは状況の同じでないことは、日本経済団体連合会（2015）が463社を対象に行った調査の結果からも明らかである。80年代には事業展開の形態として海外進出を目指す企業が多かったが、日本経済団体連合会の調査結果によると、現在はグローバル最適化を目指す企業が特に製造業において増加しており、国内外を問わず最適な人材配置のために世界の拠点間で交流を進める意向の高まりとして分析されている。また、グローバル事業で活躍する人材に求める素質、知識・能力としては、数ある項目のうち「海外との社会・文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する姿勢」が最重要視されており、このことは多様性への理解や寛容性が重要であるとの認識の広まりと解釈されている。多様性への理解や寛容性は異文化間能力に含まれるものである。同調査による2011年度の結果の3位から上昇しており、多様性への理解や寛容性がここ数年でさらに重視されるようになったことが指摘されている。このような経済界の認識がある中で、グローバル人材育成の推進が従来の型通りであるのならば、異文化コミュニケーションの研究と教育が今後そこに果たすべき役割は大きい。

本研究もまた、異文化トレーニング／教育の効果的なプログラムや方法論の開発に寄与することを志すものであり、そのための基礎となる知見を得て理論化することを目標としている。より具体的には、本研究は、文化的背景の違いの周辺で人びとが差異性についてどのような経験をしているか、日本のローカルな文脈から明らかにしようとするものである。異文化間能力に関わる重要な研究の一つとして、Bennett（1986, 2011, 2013）による異文化感受性発達モデル（A Developmental Model of Intercultural Sensitivity: DMIS）がある。DMISは個人の文化的差異の認知とそれに付随する評価を段階的に示すことで異文化トレーニングへの示唆を与え、また、DMISを尺度化した心理テスト（Intercultural Development Inventory=IDI; Hammer, 1999; Hammer, Bennett & Wiseman, 2003）が開発され、教育・ビジネス・医療などさまざまな実践の場で活用されてきた。筆者はBennettの提示する異文化感受性の概念に着目し、異文化感受性が日本の文脈でどのように具体化されるのかイーミックな視点から分析する研究を行っており、本研究を山本（2015）に続く2番目の分析として報告したい。

2. 先行研究

2.1 異文化感受性発達モデル（DMIS）と優勢経験

DMIS（Bennett, 1986, 2011, 2013）は、個人の世界観の構造が発達することによってどのように文化的差異の経験が変化するかを表すモデルであり、各段階の特徴として示される態度や行動は、その世界観を体現化したことによるものとして捉えられる。モデルは自文化中心的な段階（「否定」・「防衛」・「最小化」）と文化相対的な段階（「受容」・「適応」・「統合」）から構成されている（図1）。前者では、自分自身の文化が現実性の中心として経験される。第一次的社会化による信念や行動様式を所与として無条件に受け入れる一方、その他の代替的な信念や行動を現実味のないものと認識する。違いを見過ごす、または意図的に避ける傾向がみられる。後者では、現実を整理する方法に自分以外のやり方が数多く存在することが認識され、自分の信念や行動様式はその一つにすぎないものとして経験される。

以下にDMISの各段階の特徴について、Bennett（1986, 2011）に基づき簡略に紹介する[1]。「否定」における否定とは、違いを否定的に評価することではなく、目の前にある違いを見ていない／見えていない状態であり、違いの存在を否定している。文化をカテゴリーとして識別せず、データ（知覚情報）を異なる文化の文脈から知覚・解釈することができない。違いは経験されない、もしくは、漠然とした理解となるため「東洋人」あるいは「西洋人」のような、未分化の他者として経験される。気づいていないが故に自分の世界観は傷つかず、違いに対し否定的な評価はしないが無関心である。「防衛」では、異文化を認知するカテゴリーは複雑化するが、ステレオタイプ的な分類をし、データは「我々V.S. 彼ら」の二極化した評価カテゴリーで整理され、違いに対する優越的または侮蔑的態度として現れる。「最小化」では、差異を自分のよく知る上位カテゴリーに取り込むことで安定性が保たれる。データを自分のよく知るカテゴリーに包括し、「おじぎ、握手、キスは全て敬意を示す方法にすぎない」等、表面上には異なるバリエーションがあっても根本は同じと見なす。人間の生理的、身体的共通点を強調することや、宗教（e.g. 我々は皆神の子）や社会哲学の価値観（e.g.

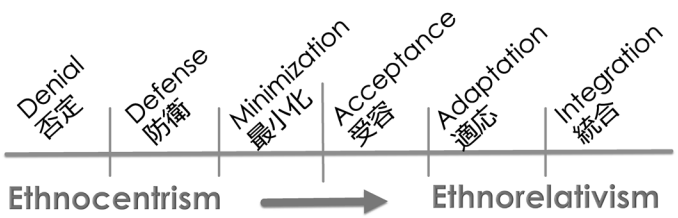

図1　異文化感受性発達モデル（DMIS）
Bennett, 1986に基づき作成

資本主義・マルクス主義）による普遍性を唱えることもある。「受容」では、カテゴリーの差異化と精緻化により、文化差は異なる世界観の産物として捉えられ、代替的で等しく価値あるものとして認められる。データは文化的文脈の中で整理され、行動や価値観が体系的に比較されるようになる。「適応」においては、カテゴリーの境界を柔軟にし、データを意識的に特定の文化的文脈に関連づけ、リフレーミングすることで、違った見方ができるようになる。様々な文化的文脈上で自分の経験を再構築することができる。自分の世界観の範囲内でそのまま模倣するのではなく、その文化差を生み出している、自分のものとは異なる世界観に感情移入し、そこから考え、行動する。「統合」においては、カテゴリーは文化または個人に影響を与えると同時に、それらによって形成され保たれるものとして経験される。データは文脈の中に生じると同時に、データが文脈を生み出す、という関係性が認識される。状況に応じ複数の世界観から対応することができ、そのように流動的なプロセス上にある自己のあり方自体にアイデンティティを見出す。

Bennett（2013）によると、6つの段階は連続体であり、個人の中にある程度は共在する。したがって、一つの段階を取り出してラベリングする決めつけ（e.g.「彼は防衛だ」）を避けるべきとしている。ただし、Bennettは、個人の文化的差異の経験の中に中心的役割を果たす「predominant experience（優勢経験）」（p. 87筆者訳）のあることを仮定している。異文化感受性の発達は、優勢経験の頂点が連続体に沿って移動することによって起きると説明されている。これは、個人の異文化感受性レベルを考えるときに、いずれか一つの段階にあてはめようとするのではなく、連続体のピークはどこにあるかという見方をするべきという提案である。Bennett（2013）は、優勢経験が全ての文化的差異に適用されるとしている[2]。つまり、異文化感受性においてピークレベルの混在はなく、ある文化で「適応」の優勢経験をする人が他の文化に「防衛」の優勢経験をすることはない。したがって、海外の取引先との商習慣の違いに共感的理解を示す人は、若手社員の職場での振る舞いにも、その世代の文化的実践への想像力をはたらかせるであろうと予測できる。もし、国レベルでの文化差に寛容な人が、他のカテゴリー（e.g., 地域、人種、性別、世代等）での違いに否定的であるとするならば、その人物の中でそれらのカテゴリーは文化として認識されていない。故に、海外との商習慣の違いに寛容であるにも関わらず若手社員の行動には非寛容であるとするなら、若手社員の行動は「文化」の差ではなく「個人」の特性や嗜好、あるいは性格の差として認知されていることになる。

2.2　文化的差異の認知と異文化の構成単位

DMISには、いかなる種別・水準の文化差も同じ異文化感受性の世界観で認識されるという前提がある。たとえば、ある人物との交流の中で違いを感じた場合、それが国レベルでの文化的実践に関わるものでも、地域あるいは所属する組織のレベルにお

ける文化的実践に関わるものでも、異文化感受性としては同じような受け止め方で認識するということになる。しかしそれはDMISにおける理論上の前提であり、どのような異文化の境界の水準であっても同じ異文化感受性が適用されるかを調査した研究は存在しない。

異文化として境界を引く集団の構成単位については、異文化コミュニケーションの定義をめぐっても議論がなされている。Gudykunst（2003）は、異文化コミュニケーションを異なるnational culture（国家単位での文化）出身の人々による対面的コミュニケーションとしており、国レベルでの文化を基本単位としている。しかし同時に、人種、民族、世代など広義に適用することも認めている。ジェンダー（Brislin, 1993）や、高齢者、同性愛者、貧困層、ヒッピー等の下位文化（Samovar, Porter & Jain, 1981）といった単位も異文化コミュニケーションでは用いられている。一方でこのような境界の引き方は文化を静的に捉え固定化しているという批判もあり、人びとが相互接触する中で自己組織化的に発生する実践コミュニティへの参加という見方もある。

日本で異文化というと、一般的に「外国文化」との認識が散見される。異文化コミュニケーションで扱うテーマの多くが国内のダイバーシティという米国とは異なり、異文化コミュニケーションは外国人との英語でのコミュニケーション、異文化理解は外国文化の理解という認識が、一般的にはもちろん、大学のカリキュラムにも多くみられる状況が日本にはある。外国や外国人というのは集団を形成する境界の一つに本来は過ぎないが、日本では異文化として突出して認知されている。外国人を想定した場合とその他の水準で違いのある相手を想定した場合（e.g. 国内での出身地方が異なる）においての比較を行い、同じ異文化感受性が適用されるものであるかの検討が必要であろう。

2.3　異文化感受性の具体的描写および「最小化」をめぐる議論

山本（1998）[3]およびYamamoto（1994）では、DMISを質的データの分析枠組みとして用い、日本人の異文化体験を読み解こうとする研究が行われている。これらの研究においては、米国に留学する日本人大学生8名に対し、渡米前・渡米直後・渡米から約半年後の3回に渡る深層面接調査が実施された。DMISの6つの段階を分析単位として、各段階に特徴的な発言や行動と照らし合わせながらデータを分類したところ、DMISの「否定」と「統合」に分類される発言はなかった。「最小化」と「適応」については、それらの段階における世界観との関連性が推論されながらも、それぞれを特徴づける発言や行動に直接結びつく発言は、キリスト教徒で渡米後も積極的に教会活動に参加していた学生の「アメリカ人の考え方が違っていても、キリスト教を通じて共通するものがあると思う」（山本, 1998, p. 86）の1件のみであった。他の日本人大学生の発言には上位概念の下で同じ人間と認識する「最小化」の観念的な特徴は見

出されなかったことが報告されている。

山本（1998）およびYamamoto（1994）の研究では、DMISを使った分析では未分類となったデータから新たにカテゴリーを起こす分析（5段階分析法, McCracken, 1988）が行われ、7つのカテゴリー[4]が抽出されている。そのうち「自文化枠組みの適用」については、行動様式の違いなどの文化差を認識できているにも関わらず、実際に経験した対人関係の解釈には日本的な枠組みを用いるという認知が、5名の参加者にみられた。実際の体験談を具体的に語る場面では、「『違い』が忘れられてしまったかのように」なり、「アメリカ人の行動を日本人の行動様式にあてはめて解釈する」ことや「日本人が日本で外国人に接する（と、信じられている）ようなやり方で、アメリカ人から扱われることを期待する」（山本, 1998, p. 88）ことが起きていたという。このように頭で違いをわかっていても同文化の人達に対するやり方で異文化の対人関係を理解しようとするのは「最小化」に関連づけられると山本は述べている。つまり、違いを認識していても、相手を自文化の土俵に引き入れたり、自文化のスキーマをあてはめたりすることは、無意識に相手を自分と同じとすることに等しく、「最小化」に通じるという考え方である。このことは、中根（1972）や稲村（1980）のいう、日本人が積極的に外国人と接しようとしているとき異質性を無視して日本的な内輪の人間同士にみられる人間関係のパターンを押しつけるということに関連があるのではと山本は推察している。

7つのカテゴリーの中から「最小化」に関連するカテゴリーとして、山本（1998）は外見にかかわる「身体的類似性」も挙げている。「同じ顔だからほっとする（p.92）」など、他のアジア人と外見上で類似する特徴に注目し親しみを感じるもので、渡米から約半年後の面接での発言が多かったという。他のアジアからの留学生とは文化的な共通点が多いという側面からの発言ではなく、肌や髪の色が同じなど外見の類似性に頼ることから、「同じ顔＝自分と一緒」という感覚のあることが指摘されている。山本（1998）は、この研究を通して、日本人の文化的違いに対する受け止め方がDMISで描写されるものとは異なる可能性や、DMISの描写とは異なる「最小化」が体現されている可能性についても考察している。

DMISの「最小化」には異なる観点からの議論もあり、Hammer（2011）によるIDI ver.3では、「否定」と「防衛」を含む段階と「受容」と「適応」を含む段階の中間に、移行期段階としての「最小化」が据えられている。DMISにおける「最小化」は自文化中心的段階にあるが、Hammerは「最小化」を自文化中心的ではないが「受容」や「適応」ほどに異文化間能力や感受性が高くない状態と見なしている。「最小化」とは対立を緩和させ受容へと導く過程であり、DMISで記述されているより異文化間能力として高いのではという指摘である。一方のBennett（2013）は「最小化」をある種の移行期とする見方は認めているものの、「『最小化』における経験は理論的に自文化中心的[5]」（p. 93 筆者訳）と主張している。DMISの各段階を解釈し直したり、各段階の

サブカテゴリーの名称を変えたりすることは、Bennett（2011）やHammer（2011）においても行われていることであり、異文化感受性が具体的に人びとの経験としてどのように表れ概念化されるかについては、今後の検討と精緻化が必要である

2.4　異文化感受性の概念構造を日本的文脈から探索する研究

日本人の文化的違いに対する受け止め方がDMISで描写されるものとは異なる可能性、および、異なる移行過程を経る可能性について、山本（2015）は、日本的な観点から捉えた文化的差異の主観的経験とはいかなるものであるかを明らかにし、それらをDMISとの関連において記述することを目的とした研究を行った。この研究は本研究における分析の基礎部分にあたるため、ここでその概要を紹介しておきたい。山本（2015）は、文化的差異の認知を日本の文脈の中に探るために質的研究に根差した量的研究を行った。この方法は混合研究法における探索的順次的デザイン（Creswell, 2015）に該当する。まず予備調査の質的研究として、日本で生活する人々の語る文化的差異の経験の表現を収集するための半構造化面接調査が行われた。文化間の差異性／同質性の認知とその評価についてインタビューガイドを作成し、社会人18名（男性10名, 女性8名; 20〜60代）に対し40〜90分の半構造化面接が実施された。データは山本を含む3名×3チームによるTKJ法[6]で、546枚のラベルを用いてカテゴリー化することが、上位概念へ収束するまで続けられた。本調査用の質問紙項目（5段階リカート法）作成には、それらカテゴリーから抽出した面接調査での言説が反映され、先行研究や理論に基づく項目は作られなかった。質問紙調査では先行研究や理論的枠組みに基づき作られた項目を使用することが通常ではあるが、本研究は質的に得たデータを質問紙の項目に変換することによって量的研究にイーミックな視点を埋め込むことを重視した。それにより、質的データ（質問紙の項目）を量的に検証することができ、また質的データの構造化を因子分析など量的手法によりはかることが可能になると考えた。インターネット調査を実施して得られた5県各200名、計1000名の量的データから64項目を用いた探索的因子分析によって特定された7因子（6つのサブカテゴリーを含む）を用い、文化的違いに対する認知が構造化され、DMISとの関連についての考察がなされた。

この結果を整理して「表1：因子の名称と特徴およびDMISとの関係」に記述する。またサブカテゴリーまで含めた共分散構造分析による確認的因子分析の結果より、「拒絶」、「逃避」、「無効化」、「曖昧化」、「積極性」、「譲歩」、「尊重」、「内面化」の8つの概念間の関係が異文化感受性の発達の観点からマッピングされ構造化された図を「図2」[7]に示す。

これらの結果について、山本（2015）は、文化的差異への防御的な反応として「防衛」のように対立し非難する認知の代わりに「否定」状態を維持しようとする認知（「逃避」）のあること、相手との交流を保ちつつ対立を避ける処世術のような認知（「違い

表1　因子の名称と特徴およびDMISとの関係

名称		特徴	DMISとの関係
違いへの不関与	拒絶	違いを拒絶して接触を回避する。できる限り最初から関与しないでおこうとする。	DMISの「防衛」のような直接対立や攻撃を避け、不関与になることで「否定」へ出戻りする。しかし、「否定」そのものとするよりは、猶予期間を引き延ばすモラトリアムな「否定」状態として「防衛」が体現されている
	逃避	違いに直面しても無関心でいることによって距離を置く。視野に入った違いを遠ざけ、最小限の関与に留めることによって不快感を軽減する現実知覚や問題解決に関わる。	
違いの無効化		違いと関わる前提だが、直視せず、適当に受け流したり、なかったことにしたりして、自分に都合の良いように管理する世界観に関わる。衝突を無駄な消耗としたり、あきらめたり、自分から流されたりすることによってやり過ごし、違いの影響力を無効化する。	交流を維持しながらも違いをかわす「防衛」
違いの克服	曖昧化	違いへの心の壁を下げる。違いをぼやかし「大した違いはないはずだ」と仮定する世界観。類似性の強調というよりは、取り立てて違いを意識しないようにすることで、自他を隔てる境界をぼやかす。	「最小化」 =「否定」・「防衛」と「受容」との中継
	積極性	積極的に違いを見つけ、興味を持ち楽しむことに関わる。	「受容」への後押し
違いの容認	譲歩	違いに対し自分なりの心づもりをして、受け入れられる方向へ持っていく自己調整。積極的な受容ではないが、心を広げて自分の許容範囲内に収められるようにする。自然に受け入れることのできないものに対し、折り合いをつける自分の中での譲歩。	自己調整による自己完結的な「受容」
	尊重	違いを認め尊重することに関わる。	「受容」
違いの内面化		違いを咀嚼し吸収しようとしたり、自己の枠組みを捉え直したり、転換したりする経験に関わる。背後にある違いを学ぶことや衝突を契機に経験をリフレームすること、さらには複数の枠組み間を往来する自己にまでも関わっている。全体に共通するのは、違いを取り込み再構成することである。	「適応」

自文化中心的

文化相対的

無所属感	無条件に帰属意識を持てる集団がなく、所属しないという感覚が強い。	不明
違いへの憧れ	違いへの憧れと劣等感が表裏一体となった気持ちを示す。	不明

の無効化」）のあること、自文化中心的な認知と文化相対的な認知との間には葛藤しながらも違いへの不安や抵抗感を和らげ前向きに捉えようとする中継段階の認知（「曖昧化」、「譲歩」）のあることを指摘した。「曖昧化」は「最小化」との関連性もあるが、相手を自分と同じと見ることよりも違いに対する構えを解くことであり、「譲歩」は自分の受け止め方を調整することであるが、それぞれ抵抗感を緩和し違いを受

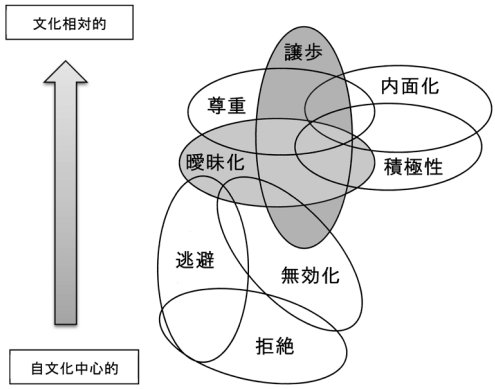

図2　異文化感受性の発達から見た概念間の関係と構造
出所：山本（2015）p. 81に基づき作成

容することに役立つと考えられている。やや自己完結的な受容であったとしても自分なりに理解する受容があり、そこから、相手にとって意味ある秩序を理解した受容へと移行することができるのではと推察されている。山本は、日本人の異文化感受性の発達のパターンが次のように推論可能ではないかと述べている。

> 違いのあることがわかっていても、できる限り触れないで済むようにし、接触が避けられない場合には、適当な方便を用いてやり過ごす。その中で、葛藤しながらも、徐々に構えを解き、自分の受け止め方を工夫するようになると、許容できる範囲が増え、自分なりの理解に基づいた受容ができるようになる。そのうちに、衝突の中でも相手から学んだり、自己の枠組みを再検討したりできるようになると、相手にとって意味ある秩序を見出そうとする受容へと変化する（山本, 2015, pp. 83-84）。

山本（2015）では日本の文脈における異文化感受性の認知的概念およびその構造がある程度まで明確化されたものの、この研究における分析は論文の紙幅の都合により相手を外国人と想定した場合のデータのみに留まっていた。今後の課題として、他の水準での文化的差異を対象とした分析や地理的環境および経済的背景などの側面との関係を明らかにすることなどが言及されている。

3.　研究の目的

本研究は、異文化感受性を日本の文脈から明らかにする研究における一連のシリー

ズの2番目に位置付けられるものである。最初の分析（山本, 2015）の目的・方法・結果・課題については、先行研究で述べた通りである。先行研究ではまた、DMISの前提への問題意識も提示した。したがって、本研究は、異文化の構成単位を複数用いて異文化感受性との関係を検討することを目的とする。そのために、個人の認知する文化的差異の構造と文化的境界の水準との関係を検証したい。またその中で、「最小化」の位置付けや役割をより明らかにしていきたい。

4. 質問紙の構成とデータの収集

質問紙の構成とデータの収集方法は山本（2015）の通りであり、先行研究の章にも概略を述べたが、本研究の目的と関わる詳細部分について補足したい。山本（2015）では国レベルでの分析が行われたが、データの収集については、後に異文化の構成単位と異文化感受性との関係を検証できるように、集団レベルでの差異性を複数設定した方法が取られていた。検証する異文化の構成単位として、国レベル（National Level: 以降NALと記す）の他に、地域レベル（Regional Level: RGL）および専門・組織レベル（Professional/Organizational Level: POL）を扱うこととした。面接調査では、1つの話題につき、「相手が外国人の場合はどうですか？」、「よその地域やよその地方の出身の人ではどうですか？」、「働く上での、職業・仕事内容の専門性や、所属する部署・組織が違う人ではどうですか？」と三方向からの確認をした。質問紙は、面接調査のデータから起こした項目のうち、相手をNAL、「他の地域・地方の人たち」、「他の専門性・所属の人たち」と個別の構成単位（集団レベル）を想定した上で回答してもらう項目（A1-A38）、共通で回答してもらう項目（B1-B27）[8]、および、その他の項目によって構成されるが、本研究ではA1-A38とB1-B27の65項目を分析に使用する。個別の構成単位ごとに尋ねる場合、たとえば、NALの場合は回答画面で「各設問について、外国人の人たちを相手として想定したとき、あなたの態度や考え方に最も近いものを1つ選択してください」という教示文と共に、A1-A38のうち1項目が画面に表れるので、回答者は5件法による選択肢「そう思う〜そう思わない」のうち1つを選択する。38項目が終わり幾つかの他の質問があった後に、先ほどは「外国人の人たち」であった箇所が「よその地域やよその地方の出身の人たち」に差し替えられた同様の教示文が現れ、ランダム化された38項目が先ほどとは違う順序で現れるようになっていた。POLについても「肩書・職業・仕事内容等の専門性や、所属する部署・組織が自分とは違う人たち」に差し替えられる以外は同様の方法で行われた。

5. 分析と結果

NAL・RGL・POLと個別に収集したデータ（A1-A38）のうち、NALのデータと共通項目（B1-B27）とをあわせた探索的因子分析（山本, 2015）の結果が、表1と図2として先行研究の中で紹介された。本研究では、同様の分析がRGLとPOLのデータに対し行われた。それぞれ計65項目を使用し主因子法による探索的因子分析を行ったところ、スクリープロットと解釈可能性よりどちらにおいても7因子構造が妥当と考えられた。7因子構造を仮定し主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った結果を「表2」に、因子間相関行列を「表3」に示す[9]。その構造は、NALの結果とある側面を除いては共通点が多かった。表2中の因子名はNALの分析結果による因子名である。サブカテゴリーを持つ因子が3つあるが、比較をシンプルにするために、サブカテゴリーまで表示するのは最も顕著に違いの現れた「克服」の「曖昧化」と「積極性」のみとする。RGLとPOLにおいても、該当する項目のとなりに配することによって、それらとRGL、POLで得られた因子との関係を考える。「NA」とはNALでの因子分析の結果、因子負荷量が.35未満であった項目である[10]。さらに「表4」には、「克服」に加え「不関与」と「容認」のサブカテゴリーまでを含めて、NAL・RGL・POLの因子間で共有された共通項目を取り出した結果を示す。

6. 考　　察

はじめに、表2の探索的因子分析の結果と表4に示された共通項目より、文化的差異に関する認知の構造においてNAL・RGL・POLの3つの境界水準の間でどのような共通点や相違点があるかをみていきたい。まず全般的な傾向をみると、NAL・RGL・POLで抽出された因子には共通点が多い。どれも7因子構造で、「不関与」、「無効化」、「無所属感」、「憧れ」を構成する項目は全てにおいてほぼ一致している。「容認」と「内面化」においても、RGLとPOLで「積極性」の項目から影響を受けること以外は、NALときわめて似通った構造を表している。異なっているのは、「曖昧化」と「積極性」である。

ここで「克服」のサブカテゴリーであり互いに相反する性質を持つ「曖昧化」と「積極性」に着目する。NALの当初の分析では「曖昧化」と「積極性」の2つは分かれずに第1因子を形成していた。14もの項目が該当していたため、より詳細な解釈を求めた再度の因子分析が行われ抽出されたのが、「違いを見つけることは楽しい」、「もっと何度も質問し理解しようとする」、「違っている部分を出されると好奇心をもつ」など違いを見出し関わろうとする「積極性」と、「自分と相手は同じと考える方がうまくいく」、「違いは上辺だけで人として皆同じはず」、「普段通りに振る舞えば大丈夫」、

表2　探索的因子分析の結果

外国人

		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
積極性	A04	**.67**	−.01	−.02	−.02	−.19	.10	.13
	A31	**.61**	−.03	.08	−.08	.07	.05	−.29
	A03	**.56**	−.20	.21	.01	−.16	.10	.15
	A15	**.56**	−.14	−.07	.19	−.07	.06	.16
	A05	**.53**	−.05	.19	.06	−.04	.07	−.07
	A14	**.42**	.04	−.02	.25	−.17	.03	.17
	A35	**.41**	−.21	.22	.15	.02	.05	.16
	A26	**.41**	−.19	.12	.26	−.08	.04	.17
曖昧化	A30	**.50**	.09	.20	−.04	.11	−.06	−.05
	A23	**.47**	.05	−.03	.00	.23	−.18	−.02
	A07	**.45**	.11	.06	.01	.15	−.12	.02
	A28	**.43**	.35	−.18	−.09	.07	−.06	.15
	A22	**.36**	.03	.06	−.04	.06	.04	−.04
NA	A06	**.49**	.25	.03	.08	−.06	−.08	.02
不関与	A16	.15	**.74**	−.15	−.10	−.05	.01	−.10
	A33	−.16	**.72**	.15	−.01	−.01	.06	−.11
	A10	−.11	**.69**	.09	.12	−.09	.06	−.08
	A12	−.07	**.68**	.17	.21	−.13	−.11	.00
	A34	−.01	**.66**	.10	.10	−.09	.06	−.11
	A11	−.29	**.60**	.30	.06	−.01	−.10	.01
	A18	.11	**.58**	−.01	−.17	.01	.05	.11
	A29	.45	**.49**	.00	−.02	.04	−.12	−.08
	A32	.38	**.49**	−.16	−.14	.03	−.04	.01
	A08	−.14	**.46**	.28	−.06	.09	−.04	.23
	A27	.34	**.41**	.11	−.07	−.09	.11	−.37
	A38	.16	**.40**	−.07	−.05	.19	−.09	.14
	B01	−.01	.29	−.09	.15	.15	.13	.01
	B13	−.24	.26	.19	.04	.20	.20	.02
	B06	.04	.23	−.01	.09	.19	.19	−.19
容認	A24	.02	.15	**.75**	−.05	−.12	.12	−.02
	A25	.15	.07	**.67**	−.12	.11	−.01	.06
	A17	.08	.09	**.61**	−.04	.06	.00	.11
	A21	.11	.09	**.48**	−.03	.08	−.04	.27
	A36	.18	.01	**.47**	.05	.02	−.06	.06
	A01	−.26	.28	**.47**	.11	−.07	−.04	.10
	A19	.26	−.08	**.46**	.16	−.02	.02	.02
	A13	.33	−.17	**.44**	.07	.01	.06	−.02
	A37	.32	−.13	**.42**	.05	.05	.03	−.05
	A20	.14	.08	**.41**	−.05	.19	−.04	.20
内面化	B11	.10	−.14	.07	**.59**	.03	−.13	−.05
	B15	.21	−.02	−.10	**.56**	.01	−.05	−.09
	B19	.01	.24	−.10	**.51**	−.28	.11	.05
	B21	.03	.10	−.07	**.48**	.07	.05	.08
	B27	.08	.05	−.02	**.48**	−.02	.07	−.03
	B05	−.03	.07	.03	**.47**	−.07	.07	.13
	B17	−.13	−.05	.18	**.46**	.19	−.04	.04
	B03	.14	−.06	.20	**.42**	.01	−.07	−.10
	B26	.16	.04	.04	.27	.12	.26	−.17
	B18	−.05	.26	.08	.26	.21	−.01	−.09
無効化	B08	−.06	−.02	.12	−.07	**.63**	−.04	.11
	B07	−.13	−.05	.20	−.10	**.59**	.07	.14
	B10	−.01	−.15	.13	−.18	**.59**	.19	−.08
	B14	.09	−.02	−.12	.07	**.56**	.00	−.08
	B09	−.14	−.08	.21	−.04	**.53**	.10	−.05
	B20	.02	.08	−.07	−.09	**.52**	.11	.07
	B02	.02	.01	−.08	.25	**.47**	−.11	.06
	B16	.14	−.02	−.12	.33	**.39**	−.12	−.13
	B12	.03	.05	−.18	.30	.31	.01	.13
	B04	.10	.14	−.06	.07	.27	.07	−.05
無所属感	B25	−.05	.02	.14	.07	.03	**.61**	−.01
	B22	.08	−.02	.01	−.04	.12	**.54**	−.06
	B23	.0	.15	−.19	.14	.06	**.37**	.16
	B24	.06	.22	−.27	.15	.17	.31	.17
憧れ	A02	.15	−.01	.25	−.01	−.03	.00	**.52**
	A09	.26	.04	.14	.04	.06	.01	**.44**

他地域

		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
容認	A24	**.69**	.18	.05	−.06	−.14	.07	−.01
	A25	**.68**	.13	−.08	.11	.01	.01	−.05
	A13	**.67**	−.15	.04	−.02	.18	.05	−.01
	A17	**.64**	−.02	−.03	.15	.00	−.03	.08
	A36	**.61**	−.01	−.07	.08	.14	−.03	−.01
	A37	**.53**	−.11	.19	−.05	.09	.09	−.06
	A19	**.53**	−.10	.27	−.10	.01	.08	.12
	A21	**.52**	.10	−.05	.27	.00	−.07	.18
	A20	**.47**	.11	−.08	.18	.03	−.07	.31
曖昧化	A31	**.54**	−.03	−.05	−.03	.40	.08	−.29
積極性	A05	**.39**	.01	.37	−.11	.11	−.01	−.02
	A03	**.36**	−.15	.22	−.12	.25	.04	.08
不関与	A16	−.22	**.78**	.01	−.01	.18	−.06	−.09
	A33	.10	**.74**	−.07	.06	−.03	−.03	−.14
	A10	.09	**.72**	.05	−.05	−.10	.00	−.06
	A34	.02	**.70**	.06	−.01	.01	−.02	−.16
	A11	−.06	**.61**	.09	.04	−.13	−.04	.07
	A18	−.09	**.59**	−.10	.01	.17	−.01	.14
	A32	−.06	**.58**	−.07	−.06	.31	−.01	−.06
	A08	.12	**.49**	−.16	.01	.11	−.01	.19
	A27	.39	**.46**	.00	−.13	.15	.05	−.44
	A38	−.01	**.41**	−.04	.24	.14	−.16	.14
	A12	.18	**.40**	.09	.02	−.07	.02	.06
NA	A01	.27	**.38**	.12	−.03	−.23	.01	−.01
	B13	.16	.29	−.03	.20	−.19	.13	−.04
内面化	B15	−.14	−.09	**.69**	.08	.09	−.02	−.06
	B11	.06	−.19	**.68**	.14	−.09	−.10	−.10
	B19	−.15	.26	**.63**	−.16	−.26	.01	.01
	B27	−.05	.08	**.58**	.05	−.04	.03	−.07
	B05	.01	.05	**.53**	.01	−.28	.02	.16
	B03	.18	−.17	**.50**	.11	−.06	−.02	−.10
	B21	−.10	.03	**.47**	.13	.01	.11	.06
	B17	.14	−.07	**.46**	.28	−.20	−.06	−.03
NA	A06	.08	.29	**.38**	−.02	.16	−.11	.02
	B26	.01	.03	**.37**	.13	.13	.29	−.23
積極性	A15	.07	−.06	**.49**	−.08	.22	−.04	.15
	A14	.09	.10	**.48**	−.13	.08	−.01	.14
	A26	.25	−.13	**.45**	−.13	.16	−.05	.15
	A35	.32	−.09	**.44**	−.10	.11	−.12	.10
無効化	B08	.15	.06	−.11	**.59**	.06	−.05	−.02
	B07	.22	.05	−.10	**.56**	−.13	−.01	.05
	B14	−.06	−.01	.09	**.54**	.07	−.01	−.02
	B02	−.10	−.02	.21	**.51**	.13	−.08	.03
	B20	−.04	.11	−.10	**.49**	.07	.07	.06
	B10	.20	−.07	−.14	**.48**	.01	.15	−.08
	B09	.25	−.05	−.11	**.46**	−.02	.10	−.08
	B16	−.08	−.10	.28	**.42**	.22	−.03	−.05
NA	B12	−.24	.02	.25	**.35**	.10	.08	.14
	B18	.01	.18	.21	.31	−.02	−.01	−.12
	B04	−.07	.18	.13	.27	.02	.05	−.04
	B01	−.16	.20	.09	.22	.02	.13	.06
	B06	.01	.12	.07	.21	.00	.21	−.08
曖昧化	A07	.20	.04	−.01	.19	**.46**	−.04	−.05
	A28	−.08	.37	.04	.01	**.42**	−.03	.07
	A23	.22	−.03	−.01	.17	**.41**	−.01	.09
	A22	.21	−.03	−.10	−.05	**.37**	.10	.00
	A29	.07	.27	.11	.22	**.37**	−.09	.00
	A30	.35	−.10	.01	.17	**.37**	−.01	−.03
積極性	A04	.05	.14	.22	−.19	**.37**	.09	.21
無所属感	B22	.10	−.13	−.12	.04	.13	**.66**	.05
	B25	.12	.01	.06	.01	−.10	**.54**	.05
	B23	−.11	.05	−.01	.02	.03	**.46**	.33
	B24	−.20	.22	.09	.13	.06	.32	.25
憧れ	A02	.14	.08	.10	−.14	.10	.10	**.51**
	A09	.09	.12	.14	−.03	.17	.08	**.44**

他専門・組織

		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
内面化	B19	**.74**	−.19	.35	−.13	−.27	−.03	−.12
	B15	**.64**	−.15	−.14	.09	.09	.04	−.02
	B11	**.62**	.05	−.24	.16	−.01	−.05	−.10
	B05	**.61**	−.01	.13	.03	−.24	−.02	.03
	B27	**.59**	−.04	.03	.06	−.09	.05	.00
	B03	**.50**	.20	−.15	.09	−.07	−.01	−.06
	B17	**.46**	.23	−.07	.29	−.19	−.05	−.08
	B21	**.46**	−.13	.03	.16	−.01	.11	.08
積極性	A26	**.54**	.02	−.13	−.04	.14	−.01	.19
	A14	**.53**	.16	.08	−.09	−.01	−.13	.07
	A15	**.47**	−.09	−.13	−.03	.21	.01	.24
	A35	**.45**	.17	−.18	−.05	.18	.00	.13
NA	A06	**.44**	.08	.30	−.03	.10	−.13	.06
	A03	.33	.27	−.12	−.17	.20	.02	.17
容認	A24	.08	**.74**	.17	−.03	−.13	.04	.02
	A25	−.06	**.71**	.06	.16	.02	−.03	.07
	A17	−.04	**.68**	.09	.09	.04	.00	.06
	A13	.14	**.59**	−.12	−.05	.21	−.02	.06
	A36	.00	**.59**	−.03	.11	.09	.00	.04
	A21	.01	**.49**	.19	.24	.06	−.19	.08
	A19	.30	**.46**	−.07	−.15	.14	.02	.11
	A37	.17	**.43**	−.14	−.04	.26	.10	−.03
	A20	.04	**.42**	.12	.20	.00	−.03	.27
無効化	B09	−.14	**.41**	.01	.36	−.01	.06	.01
積極性	A05	**.36**	**.37**	.01	−.14	.13	−.02	.03
NA	A01	−.02	**.44**	.28	−.10	−.11	.14	.18
不関与	A16	−.06	−.11	**.76**	−.04	.20	.00	−.12
	A10	.08	.23	**.70**	−.12	−.15	.04	−.03
	A33	−.13	.18	**.68**	−.01	−.02	.02	−.03
	A34	.01	.12	**.68**	−.03	.06	−.06	−.25
	A18	−.02	−.10	**.65**	.02	.15	.03	.04
	A12	.02	.21	**.50**	−.02	−.02	.10	.16
	A08	−.18	.10	**.50**	.00	.05	.08	.28
	A11	−.03	.31	**.49**	.00	−.06	.01	.07
	A32	−.02	−.22	**.45**	.09	.33	−.07	.04
	A27	.00	.28	**.39**	−.14	.34	.00	−.36
	A38	.08	−.05	**.38**	.28	.14	−.16	.11
	B13	.01	.27	**.37**	.16	−.21	.07	−.08
	B24	.12	−.27	.31	.16	.07	.28	.10
	B01	.13	−.12	.30	.19	.00	.10	−.03
	B06	.08	.06	.23	.16	.03	.19	−.19
無効化	B08	−.12	.28	−.01	**.59**	.05	−.08	.03
	B14	.02	.00	−.06	**.56**	.13	−.03	.02
	B07	−.12	.33	.03	**.54**	−.10	−.04	.08
	B02	.19	−.04	−.03	**.52**	.12	−.08	−.04
	B20	−.03	.01	.16	**.50**	−.10	.03	.05
	B10	−.19	.27	−.10	**.43**	.06	.13	.03
	B16	.21	.00	−.12	**.36**	.25	.03	−.10
	B12	.22	−.15	.10	.34	.08	.06	.04
	B18	.17	.13	.15	.30	.01	.02	−.18
	B04	.15	−.04	.16	.28	−.03	.02	.00
曖昧化	A30	−.07	.24	−.01	.07	**.60**	.08	−.2
	A07	.00	.10	.05	.10	**.60**	.02	−.03
	A29	−.03	−.02	.33	.10	**.55**	−.06	−.02
	A22	−.07	.06	.07	−.08	**.54**	.13	−.05
	A23	.00	.01	.00	.20	**.50**	.03	−.02
	A28	−.01	−.28	.34	.08	**.47**	−.11	.11
積極性	A31	.00	.32	−.10	−.01	**.56**	.03	−.20
	A04	.33	−.01	.11	−.16	.34	.02	.08
無所属感	B22	−.12	.03	.03	−.04	.16	**.63**	.05
	B25	.05	.11	.14	−.06	−.01	**.51**	.02
	B23	.03	−.19	.15	.03	.06	**.43**	.22
	B26	.26	.04	−.04	.09	.21	.33	−.14
憧れ	A02	.13	.19	.02	−.02	−.12	.06	**.65**
	A09	.11	.27	.04	.06	−.07	.03	**.59**

表3 因子間相関行列

外国人	1	2	3	4	5	6	7
1	1.00	−.10	.16	.55	.22	.11	.20
2		1.00	−.23	−.19	.42	.22	.33
3			1.00	.36	.24	−.01	−.21
4				1.00	.19	.14	.03
5					1.00	.11	.20
6						1.00	.19
7							1.00

他地域	1	2	3	4	5	6	7
1	1.00	−.02	.41	.29	.26	.00	.08
2		1.00	−.08	.41	.02	.35	.35
3			1.00	.12	.48	.15	.24
4				1.00	.13	.17	.24
5					1.00	−.03	.24
6						1.00	.05
7							1.00

他専門・所属	1	2	3	4	5	6	7
1	1.00	.37	−.15	.09	.56	.17	.26
2		1.00	−.08	.13	.28	.11	.05
3			1.00	.47	−.01	.24	.25
4				1.00	.22	.21	.21
5					1.00	.00	.46
6						1.00	.01
7							1.00

「違いでトラブルが生じても時が解決する」などDMISの「最小化」との関連が指摘された「曖昧化」であった。これらを包含する概念として第1因子は「克服」と命名されている。

一方、RGLとPOLでは、「曖昧化」と「積極性」がまとまった因子になる現象はみられなかった。RGLおよびPOLにおいて、「曖昧化」はむしろ独立した因子とすることができる。RGLとPOLのF5は、どちらもNALの「曖昧化」の5項目と「積極性」の1項目によって構成されている。

NALでの「曖昧化」は、図2に示されるように文化相対的な「内面化」や「尊重」との関係がある一方で、自文化中心的な「逃避」(「不関与」のサブカテゴリー）や「無効化」とも同程度の強さの相関関係のあることから、両者を中継する段階として位置付けられた（山本, 2015)。また、DMISの「最小化」が類似性や普遍性を強調し、文化的差異を上位の普遍的概念に吸収させ相手を同類化するのに対し、相手に対し構えを解くのが「曖昧化」である。したがって、違いを遠ざけたり心の壁を作ったりするのをやめ、相手は思ったほど違わないのだから大丈夫、と垣根を取り払い仲間に入れる意味合いでの「最小化」と考えられる。

では、RGLとPOLで「曖昧化」が独立した因子になることによって何が変わるであろうか。NALでの「曖昧化」は自文化中心的な「不関与」や「無効化」と中程度の相関が認められていたが、RGLとPOLで新たに独立した「曖昧化」は、それらとの相関が認められなかった。その一方で、文化相対的な「内面化」と関わっているRGLのF3およびPOLのF1とは中程度以上の相関があった。したがって、より肯定的な効果が考えられる。「区別はしない（区別はない)」、「一緒」または「仲間として認める」、「同じ仲間」のように、より前向きで主体的な意味として解釈できる。これを、境界線を引き直すことで自他を包括する（e.g. 日本人と中国人ではなく同じアジア人）リフレーミングとして、あるいは、一体感や絆などのつながりによって自他が包括される状態として考えてみることができるのではないか。

異文化トレーニング／教育には、ものごとや事物の分け方は本質的なものではなく境界は作られたものであることを理解し、柔軟性を養うことで境界線を捉え直すというトレーニングがある。たとえば、文房具や小石、ガラス玉や衣類など、雑多な小物の混ぜ合わせを用いて、境界線を引き直し分類法を変えていくというペアワークでは、相手が無言で分類するのを見ながら、形・色・使用法・感触その他、どんな基準

表4　外国人、他地域、他専門・組織に共通する項目

			外国人	他地域	他専門・組織
F1 克服	曖昧化	ものの見方ややり方がお互いに違っていたとしても、自分と相手は同じと考える方がうまくいく	A07	A07	A07
		「○○国の人は……な人が多い」など国の単位で見て、その集団に特徴的な行動パターンや、考え方の傾向があるというのは間違いである	A22	A22	A22
		価値観や行動の基準が異なることが原因でトラブルが生じたとしても、時（時間）が解決してくれる	A23	A23	A23
		自分の周りにいるのがほとんど外国人という状況でも、そもそも自分は相手のものの見方や行動の仕方が自分のとは違っていることに気がつかない	A28	A28	A28
		自分の周りにいるのがほとんど外国人という状況で、相手のものの見方や行動の仕方が自分のとは違っていたとしても、違いには目を向けず似た部分だけを見るようにする	A29	A29	A29
		自分の周りにいるのがほとんど外国人という状況で、相手のものの見方や行動の仕方が自分のとは違っていたとしても、上辺だけの話であり人間として皆同じはずだ	A30	A30	A30
	積極性	○○の人たちと、積極的に関わっていきたい（○○には、「外国人／よその地域・地方の出身／肩書・職業・仕事内容等の専門性や、所属する部署・組織が自分とは違う人たち」のうち、それぞれ該当する言葉を入れて表示される）	A03	外国人のみ ←	
		むしろ○○の人たちと一緒にいる方が、自分は気楽でやりやすい（○○には、「外国人／よその地域・地方の出身／肩書・職業・仕事内容等の専門性や、所属する部署・組織が自分とは違う人たち」のうち、それぞれ該当する言葉を入れて表示される）	A04		
		○○の人たちと関わるときには、通常の場合よりもっと何度も質問して理解しようとする方だ（○○には、「外国人／よその地域・地方の出身／肩書・職業・仕事内容等の専門性や、所属する部署・組織が自分とは違う人たち」のうち、それぞれ該当する言葉を入れて表示される）	A05		
		ものの見方ややり方が自分と違う人たちに深く関わった結果、自分でもその人たちの見方ややり方を実践できるようになった経験がある	A14		
		価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、わくわくする	A15		
		自分と相手との間に違いを見つけることは楽しい	A26		
		自分の周りにいるのがほとんど外国人という状況でも、普段通りに振る舞えば大丈夫	A31		
		相手が自分と違っている部分を全面的に出してくると、その違いに対し好奇心を持つ	A35		
F2 不関与	拒絶	相手の行動や発言が自分と違っていて理解できないと、イライラしてしまう	A10	A10	A10
		なじみのない言葉づかいで接してくる相手だと、引いてしまう	A11	A11	A11
		なじみのない言葉づかいの人と接したとき、相手の表現の仕方を「きつい（表現が強すぎる）」と感じてしまう	A12	A12	A12
		相手の価値観や行動の基準に自分と違うところがある場合、可能であればつきあいたくない	A33	A33	A33
		一緒に達成すべき共通の目的や目標がない相手の場合、その人たちに関心が持てない	A34	A34	A34
	逃避	価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面しても、理解したいとは思わない	A16	A16	A16
		価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したら、どうでもいいやと投げやりになる	A18	A18	A18
		価値観や背景の異なる相手が大勢いる中にいたとして、その状況に注意や関心を向けなくてもよい	A32	A32	A32
		価値観や行動の基準が異なる相手とは、話し合ってぶつかるよりも、うやむやのまま折り合いをつける方がよい	A38	A38	A38
F3 容認	譲歩	価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、そういうものだと自分に言い聞かせる	A17	A17	A17
		価値観や行動の基準が異なる相手に対しては、自分から相手に合わせることでトラブルを未然に防ごうとする	A20	A20	A20
		価値観や行動の基準が異なることが原因で相手とぶつかりあったとき、やれやれと思いながらも許容する	A21	A21	A21
		価値観や行動の基準に自分とは違うところがあるだろうと、最初から覚悟しておく	A24	A24	A24
		価値観や行動の基準に自分とは違うところのある人だからと、割り切るようにする	A25	A25	A25
		価値観や背景の異なる相手が大勢いる中では、多少の居心地の悪さは受け入れる	A36	A36	A36
	尊重	自分で取り入れて実践するまではいかないが、相手のものの見方ややり方が自分とはどう違っているのか認識しそれを尊重する方だ	A13	A13	A13
		価値観や行動の基準が異なることが原因で生じるトラブルから、多くのことを学ぶことができる	A19	A19	A19
		価値観や行動の基準において違いがあることで、これからも互いに衝突するかもしれないが、その違いは失わずに持っていて欲しい	A37	A37	A37
F4 内面化		ものの見方ややり方が違う人に触れると、相手とどんな所が違い、どんな共通点があるのかきちんとわかりたいと思う		B06	
		ものの見方ややり方が違う相手に触れて、自分の固定観念が崩された経験をしたことがある		B08	
		価値観や行動の基準が異なる相手とぶつかりあう苦労を嫌がらずに、そこから得られる新しい発見や気づきを重視する方だ		B14	
		これから相手と一緒に何かに取り組まなければならないという前提のとき、想定外のことを言われたり、されたりすると、興味がわいてくる		B18	
		相手の価値観や行動の基準に自分と違うところがあったら、どうしてそうなのか自分にとって受け入れやすい理由を探す		B20	
		出身の国や地域、あるいは肩書・職業や専門性などが自分とは違う人と、考え方ややり方の違いをめぐって衝突した経験がある		B22	
		「○○に所属する」・「○○の人」・「○○出身」・「○○人」等の自分がその一員であると強く感じられる集団を特に持たずに、複数の集団間を流動的に行ったり来たりしているところに自分らしさや自分のアイデンティティを感じている		B21	
		他の集団（国、地域、肩書・職業・専門・所属・組織）の人びとに対応するために、日頃から、自分の考え方やコミュニケーションの取り方のモード（在り方・仕方）を切り換える経験をしている		B27	
F5 無効化		相手の価値観や行動の基準に自分と違うところがあったら、相手の良い所だけを見て、嫌なところは見ないようにする		B05	
		価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、仕方がないとあきらめる		B10	
		価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面しても、適当に受け流す		B11	
		自分と相手との間に、価値観や行動基準の違いがあるのは当たり前で、いちいち考えるのは無駄だ		B13	
		これから相手と一緒に何かに取り組まなければならないという前提のとき、想定外のことを言われたり、されたりしても、深くとらえずやり過ごす		B17	
		互いに違う見方をしてぶつかりあったとき、自分と相手は「本質的には同じ」と考える方がうまくいく		B19	
		出身の国や地域、あるいは肩書・職業や専門性などが自分とは違う人と、考え方ややり方の違いをめぐって衝突することは、時間や労力の無駄な消耗だ		B23	
F6 無所属感		「○○に所属する」・「○○の人」・「○○出身」・「○○人」等で表せるような集団について、自分はどこの集団にも完全には所属していないという感覚がある		B22	
		どこの集団にも完全には所属しない感覚があるため、根無し草のような不安定さを感じる		B23	
		どこの集団に身を置いても、完全に一体化して気楽に無意識でいることができず、客観的な視点で眺めてしまう		B25	
F7 憧れ		自分との違いを感じるが、それがうらやましかったり、憧れを感じたりもする	A02	A02	A02
		相手の人たちのものの見方ややり方の方が優れていると感じることが多い	A09	A09	A09

でグループ分けをしたのか推測をする。分け方は幾通りにも可能なことや、社会的に教えられた基準、自分自身が作っている基準のあることにも気づかされる。積極的に仲間に入れるリフレーミングを可能にする「曖昧化」は、より現実社会に則した文脈の中でもリフレームできるような認知的トレーニングを行うことが重要な意味を持つことを示唆するものと考えることができる。

自他を包括することは、境界を引き直すことの他に、一体感を持つことによっても起きる。異文化トレーニングは認知、情動、行動の3つの側面からのアプローチを扱うが、境界を引き直すことが認知的なトレーニングで可能なのに対し、一体感は知的な理解を通じて生まれるものではない。河野（2012）は、米国在住の日本人を対象に職場における米国人スタッフや関係者との関係形成に関わる面接調査を行い、「場」の理論と現象学的身体論の知見からの考察を行った。「試作品をつくるのに10時過ぎまでやったとき、皆でハンバーガーを食べながらやったときはキャンプのような一体感を感じた（40代男性, 日系精密機器メーカーエンジニア）」（p. 82）や「建物内のスタッフが一つのユニットという感覚はある。ある種の一体感（50代女性, 米国大学教員）」（p. 81）のように「一体感」がキーワードとして表れる言説もあった。河野は相手についての知的理解が必ずしも「一体感」を生むものではなく、理性的な判断や解釈による他者理解とは別な層で起きている関係生成の可能性を想定するのが妥当と述べている。さらに、現象学による身体的なコミュニケーション（露木, 2003）や生体間の引き込み現象（清水, 1999; 2000; 三輪, 2000）の例を引きながら、これらの例に共通するのは、空間を共有する個人間にはその意志とは無関係にすでに身体レベルでの関係生成が起きている事実に言及することであると指摘している。つまり、頭で異文化理解をした結果ではなく、同じ空間を共有し身体感覚を通して収集された情報が感覚や潜在意識にはたらきかけることによって一体感が生まれるということである。相手との違いはそこまでのものではないはずと境界をぼやかすのが「曖昧化」であるが、理屈抜きに垣根を飛び越えてしまうのが一体感を持つという体験であるとも考えることができる。認知面から情動や行動にはたらきかけるトレーニングの他に、身体感覚を通じ内面化された経験が認識や態度にフィードバックされる効果の重要性にも着目される。

山本（2005）が外国人職員と日本人職員を対象にした研修プログラムに立てた仮説的学習目標の中に「共同作業が自己と他者を統合する一体感をつくる（p. 23）」がある。これを達成する学習ユニットとして、コミュニケーションとは何かを考えるための導入であると同時に、身体的共同作業により体で感じる一体感と呼吸を経験することを目的とした「キャッチボール・エクササイズ」が考案されている。共同作業が一体感を生み出すような場を設定することに関連し、山本（2005）は伊丹（1999）の「人々が参加し、意識・無意識のうちに相互観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、共通の体験をする、その状況の枠組みのことである（p.

23)」という「場」の定義がコミュニケーション的考察に役立つと述べている。キャッチボール・エクササイズでは、参加者が個々に独立した個人としての境界を持ち込んだ状態から、課題によって個人と個人を包括する新たな境界が出現するように「問題が境界をつくるような場」を設定したという。「曖昧化」は一体感や仲間作りの重要性を示すと考えるとき、人の交流や対面的コミュニケーションをトレーニングとしてより役立てる方法を模索する必要性が強調される。

ここまで「曖昧化」について述べてきた。「曖昧化」が独立するのであれば、もう片方の「積極性」はどうなったであろうか。RGL、POLの両方の分析において、「積極性」は「内面化」と結合した因子を形成することが確認された。それらはRGLのF3とPOLのF1であり、「内面化」からの8項目と「積極性」からの4項目が合併することで構成されている点が全く同じである[11]。「克服」のサブカテゴリーとしての「積極性」が「曖昧化」とセットであったために、どんどん前に出るような行動力をともなった積極性というよりも、もっと気楽に興味を持って前向きでいればよいというポジティブメッセージとしての意味合いが感じ取られた。しかし「内面化」と一緒になったこれらの因子では、違いを克服する積極性ではなく、違いから影響を受けたり適応したりすることを楽しむ意味での積極性があると解釈できる。

以上より、文化的差異の認知をNAL・RGL・POLの3つの境界水準で検証した結果、全体として7因子構造であり概念的な構造には共通点の多いことがわかった。しかしながら、「曖昧化」と「積極性」が「克服」の一因子にまとまっていたNALにおけるこれらの意味と、「曖昧化」が独立し「積極性」が「内面化」と合併したRGL、POLにおけるこれらの意味では、違いが生じることも明らかになった。NALの人たちを相手と想定した異文化接触と、RGLもしくはPOLの人たちを相手と想定した異文化接触では、「曖昧化」や「積極性」と関連した認知の異なることがうかがえる。

7. おわりに

本研究では、異文化感受性を日本の文脈から明らかにしていくことを目的とした一連の研究の一部として、個人の認知する文化的差異の概念構造と異文化の構成単位との関係を検証した。その中で、「最小化」の位置付けや役割を「曖昧性」との関連において考察し、異文化トレーニングへの示唆についても言及した。国レベル、地域レベル、専門・組織レベルで分析し比較した結果、これらの構成単位間には文化的差異の認知に共通点の多いことがわかった。しかし、自他の区別を意識しない「曖昧性」や異質性への前向きな姿勢を示す「積極性」は、接触する相手が外国人であるか他地域や他専門・組織の人であるかの文脈が変化することにともない、その意味合いの変わることがわかった。

DMISにおける「最小化」は自文化中心的段階の1つであり、Bennett（2013）によると、ある種の移行期であってもその経験は理論的に自文化中心的である。Hammer（2011）は、「最小化」を自文化中心的ではないが「受容」や「適応」ほどではない状態としており、対立を緩和させ受容へと導く過程としていた。本研究において「最小化」に関わる「曖昧化」が自文化中心的か文化相対的であるかの結論は出ないが、受容へと導く過程であるという見方は共有できる。本研究の範囲で明らかになったことから、「曖昧化」は対立を緩和させるというより、違いとの間に壁を作る状態や違いを直視しない状態を緩和させるという意味が強いと考えられる。中継段階として重要であるため、今後は異文化トレーニング／教育でどのように活用が可能であるか更なる検討が必要である。

DMISにおける優勢経験が全ての文化差に適用されるという前提については、今回検証したNAL・RGL・POLの間に明らかに共通点の方が多いことを踏まえると、基本的にそれを肯定するという結論になる。しかし、NALでのみ異なる点のあったことには注意を要する。「曖昧化」と「積極性」がNALでのみ1因子になり、「克服」の意味を持っていたことは、日本での外国人への意識においては、積極的に興味を持ち関わることと違いを意識しないことが同じ次元上で認識されていることを示唆している。異文化を構成する単位の中でも外国人にはハードルの高さが強く意識され、そのため壁を下げるひと手間が必要な可能性も推察できることから、このような文脈は考慮されるべきである。

3水準で共通した結果が出たこととデータ収集の方法との連関性については次のように考える。本研究では、質問紙でよく見られる、同じ質問が3つの水準で並列する表示を避け、それぞれ個別にした上で質問は1つずつ表示されるようにし、さらに出てくる順番がランダムになるような配慮をした。同じ質問に同じように答えるというリスクは低かったとするなら、これら3つの水準での共通性は高いといえるであろう。

本研究によって異文化感受性を日本の文脈から明らかにするために得られた知見はまだ少ないため、今後は外国人との日常的な接触経験の有無や地理的環境や経済的背景などによる影響からも分析も進め順次報告していきたい。明確になってきたことのある一方で、まだ不明な点も多いため、さらに関連した研究を展開することで異文化感受性に関わるより多くの知見を得て異文化トレーニング／教育の分野へ貢献したい。

注

[1] 山本（2015）の中でより詳細な説明がなされており、本稿ではそれらに重なる部分も大きいが、より簡略化した説明を行う。

[2] DMISを基礎に開発されたIDI（Hammer, 1999; Hammer, Bennett & Wiseman, 2003）もまた同様である。IDIは「other culture（他の文化）」や「different culture（異なる文化）」をどう認識し

評価するかを尋ねる項目で構成されている。しかし文化の単位・種別は定義されず、何を異文化と想定して回答するかも個人の解釈に任されている。

[3] 山本（1998）は、Yamamoto（1994）による修士論文を基に筆者が書いた論文である。修士論文の研究は、研究計画からデータの収集と分析およびその考察までが1991〜93年にかけて行われており、参考文献に使用した日本の文献は70年代から80年にかけ広まっていた日本人論（中でも日本人特殊論）に該当するものも多く、その影響がデータの解釈や考察に現れているため、現在では必ずしも適切とは言えない部分がある。なお、山本（1998）の中で「異文化感受性」を「異文化センシティビティ」、「最小化」を「最少化」など本稿とは異なる翻訳をしている。sensitivityをセンシティビティとしたのは、「『感受性』と理解するより、異文化を感受（センサー）する能力と解釈する方がモデル上では適当」（p. 79）と判断したためである。しかしその後多くの日本の文献で「異文化感受性」の翻訳語が使用されるようになったため、本稿も異文化感受性としている。「最少化」については、本モデルの依拠する理論の中に認知的複雑性のある点を考慮し、カテゴリー数が「最少化」されるという意味で用いたが、多くの文献で「最小化」が採用されているためそれに準じている。

[4] 「身体的差異への注目」、「身体的賛辞」、「身体的類似性への注目」、「自文化枠組みの適用」、「差異存在の当然性」、「差異存在の不可避性」、「観察重視」の7つである。

[5] 「理論的に自文化中心的」というのは、DMISの理論そのものに基づいて判断した場合に自文化中心的であるという意味である。

[6] TKJ法とは複数人から成るチームで行うKJ法である。

[7] 理論的考察および確認的因子分析の結果より相関係数（共分散）を参考にして、因子間の関係をより視覚的に捉えるために、各因子の関係がマッピングされている。基本的に相関関係が強いほど重なりが大きく、弱いほど少なくなるよう描かれている。

[8] 全ての項目について個別の単位ごとに尋ねる方がより詳しい結果を得られるが、回答する側にとっての適正な質問数や回答時間に配慮した結果、個別に尋ねる項目数を限定した。

[9] 主因子法の他に最尤法を試みたところ類似した結果を得た。

[10] NALの第1因子にある「NA」のみ、この因子に再度の因子分析をして2因子（積極性と曖昧化）を抽出した際に因子負荷量が.35以下の項目（A06）である。

[11] わずかな違いとしては、「NA」2項目のうち1項目が「他専門・地域」で該当しないことがあるが、「NA」は考察の対象から外している。

引用文献

伊丹敬之（1999）『場のマネジメント：経営の新パラダイム』NTT出版

稲村　博（1980）『日本人の海外不適応』日本放送出版協会

河野秀樹（2012）「異文化間における共創的関係の自己組織　在米日本人へのインタビュー調査からの考察」『異文化コミュニケーション』15: 71-91

清水　博（1999）『新版　生命と場所　創造する生命の原理』NTT出版

清水　博（2000）「共創と場所：創造的共同体論」清水博（編）『場と共創』NTT出版, 23-178

露木恵美子（2003）『場と知識創造』北陸先端技術大学院大学博士論文

中根千枝（1972）『適応の条件』講談社現代新書

日本経済団体連合会（2015）「『グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート』主要結果」日本経済団体連合会　2015年3月17日＜https://www.keidanren.or.jp/policy/2015/028_gaiyo.pdf＞（2015年8月10日）

三輪敬之（2000）「共創における生命的コミュニケーション」清水　博（編）『場と共創』NTT出版, 273-338

山本志都（1998）「異文化センシティビティ・モデルを日本人に適用するにあたって　再定義の必要性について」『異文化コミュニケーション』2: 77-100

山本志都（2005）「コミュニケーションは対人的気づきを深め関係を再構成するか（その1）JETプログラムCIRと担当者を対象とした研修の開発」『青森公立大学紀要』10(2): 21-34

山本志都（2015）「文化的差異の経験の認知　異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述」『多文化関係学』11: 67-86

Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, *10*, 170-198.

Bennett, M. J. (2011). A developmental model of intercultural sensitivity. The Intercultural Development Research Institute. <http://www.idrinstitute.org/allegati/IDRI_t_Pubblicazioni/47/FILE_Documento_Bennett_DMIS_12pp_quotes_rev_2011.pdf> (August 1, 2013)

Bennett, M. J. (2013). Intercultural Adaptation. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, & practices*. Boston, MA: Intercultural Press. pp. 83-103

Brislin, R. (1993). *Understanding culture's influence on behavior.* Fort Worth, TX: Harcourt Brace.

Creswell, J.W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Gudykunst, W. B. (2003). Cross-cultural communication: introduction. In W. Gudykunst (ed.), *Cross-cultural and intercultural communication*. Thousand Oaks, CA: Sage. vii-ix.

Hammer, M. R. (1999). A measure of intercultural sensitivity: The Intercultural Development Inventory. In S.M. Fowler & M. G. Fowler (Eds.), *The intercultural sourcebook.* Vol. 2. Yarmouth, ME: Intercultural Press. pp. 61-72.

Hammer, M.R. (2011). Additional cross-cultural validity testing of the Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, *35*, 474-487

Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, *27*, 421−443.

McCracken, G. (1988). *The long interview.* Newbury Park, California: SAGE.

Samovar, L. A., Porter, R. E., & Jain, N. C. (1981). *Understanding intercultural communication.* Belmont, CA: Wadsworth.

Yamamoto, S. (1994). *A qualitative study of Japanese students' intercultural experiences in the U.S. in relation to the developmental model of intercultural sensitivity*. Unpublished master's thesis, Portland State University, Portland, Oregon.